
今日でお別れ（完全版）

りったん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日でお別れ（完全版）

【Nコード】

N7682K

【作者名】

りったん

【あらすじ】

「今日でお別れ」をスピンオフも含めてまとめてみました。

一話ごとに、二百文字、四百文字、八百文字、千六百文字、三千二百文字、六千四百文字、一万二千八百文字と増えて行く「倍倍小説」です。

プロローグ 別れるんだから！

律子はOL。

珍しくお付き合いできた彼と、どうしてもやって行けなくなった。

「今日こそちゃんと言おう」

相手を会社の屋上に呼び出した。

イケメンの藤崎君、年下。

彼は二股をかけている。

いや、三つ股？

だって、香でしょ、真弓でしょ……。

みんな同僚じゃん！ 酷いわ。酷過ぎる。

来た。

「何、こんなところに呼び出して？」

藤崎君は爽やかな笑顔で言った。

もう、その笑顔には騙されない。

律子は意を決して言った。

「結婚して下さい」

第一章 真弓のために！

律子はOL。

別れるつもりで呼び出した藤崎君に、

「結婚して下さい」

と言ってしまい、結果的に別れられた。しかし、何とも後味が悪い。

「律子、元気出しなよ」

真弓が慰めてくれた。律子はふとある事を思い出し、

「真弓、お腹の調子どう？」

「な、何の事よ!？」

律子が心配して尋ねたのに、真弓は激怒して行ってしまった。

気づくと、すぐそばに藤崎君がいた。

「げ」

律子は気まずくて、彼から離れた。

真弓は律子が藤崎君と付き合っていて、別れたのは知らない。

真弓も騙されているのだ。藤崎君は凄腕のイケメンなのだ。

律子は、真弓が可哀相だと思い、藤崎君に意見する事にした。
気まずいけど、真弓が私と同じ思いをするのは耐えられない。

「藤崎君」

律子は廊下を一人で歩いている藤崎君に声をかけた。

「何です、律子先輩？」

ああ、昨日までは、

「りったん」

と呼んでくれていたのに……。

ダメ、そんな事では！

律子は覚悟を決めて言った。

「また付き合って下さい」

第二章 ホントにダメな私

律子はある大手企業のOLである。

先日、幾人もの女性と交際をしている名うてのプレイボーイの藤崎君に意見しようと声をかけ、

「また付き合ってください」

と言ってしまい、本当にまた付き合うことになってしまった。

（私はバカだ）

ようやく自分の性格のいい加減さに気づいた。

でも、また藤崎君と付き合える事になって嬉しい自分が確実にいる。

（懲りてない……）

再び反省。これではダメになってしまう。

「おはよう、律子」

香が声をかけた。

「お、おはよう、香」

何故かドキッとする。

律子の勘では、藤崎君の本命は香。

確かに彼女は美人で仕事もできて、上司の信頼も厚いから、律子とは比較にならない。

対する真弓は、フェロモン出し捲りで、大人の女性だ。

昔、幼児体型と揶揄された事もある律子とは違う。

では、何故藤崎君の本命は香なのかと言うと……。

根拠はない。只何となくなのだ。

遊ぶなら、お色気ムンムンの真弓だろう。

しかし、上昇志向が強い藤崎君は、結婚相手には、多分香を選ぶはず。

そんな勝手な思い込みから、律子は真弓の力になってあげようと思ったのだ。

「どうしたの、律子？」

しばらくボンヤリしていたので、香がそれに気づいた。

「ああ、ごめん。考え事してた」

律子は作り笑いをして応じた。香は訝しそうな目で、

「また何かあったの、彼と？」

「へ？」

ギクツとする律子。

「別れた彼とヨリを戻せたんでしょ？」

ああ、そんな事話したっけ。

「別に何でもないよ。ちよつとボンヤリしただけ」

「ならいいんだけど」

こんな優しい香だから、藤崎君が狙うのも当然だ。

新入社員の須坂君まで香に気があるという噂だから。

羨ましい。

あれ？ ふと思う。

じゃあ、どうして私、また藤崎君と付き合えるようになったの？

もしかして、私が本命？ いや、あり得ない。

そんな妄想は今すぐシュレッダー行きにしないと。

視線を感じて顔を上げると、藤崎君が律子を見ていた。

「結婚して下さい」

思わずそう言いそうになる律子だった。

第三章 律子危機一髪！

律子はお人好しでそろっかしいOLである。

別れようと思って結婚して下さいと言ってしまったり、同僚の真弓のために意見しようとして、また付き合って下さいと言ってしまったりと、漫画並みのオツチコチヨイである。

「はあ」

つい、溜息も大きくなる。

「溜息の数だけ、幸せは逃げて行くんだよ、律子」

真弓が嬉しそうに言う。

何よ、あんたのために須崎君に意見しようとしたら、あんな事になったのよ！

でも、別に真弓が頼んだ訳ではないので、文句も言えない。

それにしても、どこか嬉しそうな真弓の顔は癪に障る。

「何かいい事でもあったの、真弓？」

律子は皮肉交じりに言ってみた。すると、

「別れないわよお」

ますます嬉しそうだ。気になる。

「じゃあねえ」

真弓は庶務課に行ってしまった。

「気がついた、律子？」

すると入れ替りに香が来た。

「え？ 何？ 私、鼻毛出てる？」

思わず言ってしまう。香は噴き出して、

「違うわよ。真弓の事」

「真弓の鼻毛が出たの？」

律子のボケは天然である。悪意はない。

「鼻毛から離れなさいよ。真弓の私服よ」

「は？ 私服？」

ますます意味がわからない。香味は声を低くして、

「真弓、昨日と同じ服だったわ」

「フーン。どうしたのかな？」

ファッションには人一倍気を使っている真弓にしては、何て凡ミスと律子は思ったが、

「わからないの？ お泊りしたのよ、多分」

「え？ 何で？」

ここまで天然だと、さすがに温厚な香もムツとしてしまう。

「あのね、ここまで言ってピンと来ないって、律子ってド天然ね」

「何なのよ？ ホント、わかんないんだってば」

律子は泣きそうな顔で言う。香は律子の耳元に顔を近づけて、

「真弓、ホテルに泊まったのよ」

「ホテル!？」

大声で言ってしまう律子。お約束の反応に香は項垂れる。

「って事は、つまりその……」

律子もやっと香が言おうとしている事がわかったようだ。

「そう、そういう事」

香は目を細めている。律子の鈍感さ加減に呆れ果てたようだ。

「ご両親と喧嘩して、家に帰らなかったのね？」

香の目が点になった。

「もういいわ、律子」

香は自分の席に戻って行った。

（ごめん、香）

本当は律子は気づいていた。あそこまで言われればいくら鈍感でもわかる。

もし仮に真弓がお泊りしたとすれば、相手は間違いなく藤崎君だ。

それは困る。香が可哀相だ。

よく考えてみると、私の存在も香にとって「敵対勢力」なのかな？

律子は呑気にそう思った。自分が遊ばれているのかも知れないとは思わずに。

そう言えば。今日は藤崎君の姿が見えない。

昨日真弓に壊された？ それは大袈裟だけど、真弓は凄いつて噂を聞いたし。

何が凄いのかは、聞いていないのだが。

真弓が戻って来たぞ。

律子は仕事に戻った。

「庶務課の連中、私の事、嫌らしい目で見るんだから」

真弓は全員に聞こえるように言った。新入社員の須坂君はギクツとして真弓を見た。

真弓は相変わらず制服を色っぽく着ている。

ボタンは二つ外し、スカート丈は自分で詰めたようだ。

律子は標準の丈でも短いと思っているのに。

（嫌らしい目で見られたいんじゃないの、あんたは？）

律子は真弓の後ろ姿を見て思った。そして、意地悪な質問を思いついた。

「ねえ、真弓、藤崎君、今日見かけないんだけど、どうしてか知ってる？」

視界に入っている香は、ビックリして律子を見ている。

「さあ。どうしたのかしらね？ 私も知りたいわ」

真弓はアツケラカンとした顔で応じた。

（あれ？）

え？ 違うの？ やば……。

しくじったと思う律子だった。

お昼休み。

香が律子のところに来た。

「さっきのあの真弓への質問、どういう事？」

察しのいい香。すでに口調は尋問のようだ。

「どういう事って？」

天然のフリをして乗り切ろうとする律子。

だが、香刑事は容疑者律子を逃がさない。

「何か知ってるわね、貴女？」

全身に嫌な汗が出て来る。律子容疑者は追い詰められた。

「何も知りませんよ、お奉行様」

「そんな逃げ口上は許さないわよ。全部吐きなさい」

絶体絶命の律子だった。

第四章　ねずみ色の脳細胞の活躍？

律子はOL。そして粗忽者。

昨日もうっかり発言で、同僚の香が鬼刑事のように問い詰めて来たが、惚け捲って何とか誤魔化した。

と言うより、律子のあからさまなボケに、香が呆れてしまったのであったが。

そして今日は、香の代わりに真弓に詰め寄られていた。

「律子、昨日のあれ、何のつもり？」

真弓は香と違い、何か慌てた様子だ。

「見たの、もしかして？」

小声で尋ねて来る。律子が逆に驚く。

「な、何をよ？」

ボケではなく、本当に知らないので尋ね返す。

「あんた、私が藤崎君のお見舞いに行った事、知ってるんでしょ？」

「お見舞い？」

え？　藤崎君、病気？

「課長には連絡入れたみたいだったけど……。彼、高熱で魘されてたのよ」

真弓の言葉は妙に言い訳がましかった。

「藤崎君が病気だなんて知らなかったよ。もちろん、真弓がお見舞いに行ったなんて思わなかったし」

「じゃあ、どうして昨日あんな事言ったのよ？」

当然の疑問だ。でも、真相を話すと、香を巻き込んでしまうので、言えない。

あ。疑問が湧いた。

「あのさ、真弓」

「何？」

真弓は、律子の言葉に一々ギクツとしている。

「藤崎君、高熱で魘されてたのよね？」

「そうよ」

「あんた、どうやって藤崎君の部屋に入ったのよ？」

律子はしてやったりの「どや顔」で尋ねた。真弓の顔が見る見るうちに蒼ざめる。

よし、これで形勢逆転。律子はニヤツとした。

「そ、それは……」

何とか誤魔化したい真弓だったが、いい切り返しが思いつかない。

「それから、どうして藤崎君が寝込んでるって知ってたの？」

「……」

真弓は項垂れている。これ以上問い詰めるのはまずいと律子は思った。

「また後で」

律子は仕事に取り掛かった。真弓はホッとして自分の席に戻る。

（それにしても、真弓の奴、どうやって藤崎君の事を？）

真弓がお泊りしたのは事実だ。でもそれは、香と律子が想像したような事ではなかった。

多分、彼女は藤崎君を一晩中看病していたのだろう。

だから、服が一緒だった。

どちらにしても、何とも羨ましい話。律子は早速藤崎君のアパートに行く事にした。

待てよ？ 真弓もまた行く？ バッティングはまずい。

私が藤崎君と付き合っているのは、秘密なんだから。

あ！ また思いついた。

真弓が、もし仮に藤崎君の看病をしていたのだとしても、あれほど慌てたりするのは不自然だ。

名探偵律子が「ねずみ色」の脳細胞をフル回転させる。

藤崎君の具合が悪くなった時、真弓がそばに居合わせた。

その場所が、真弓にとって知られたくない所。

わわ。それって、もしかして、ホテル？

律子は一人で興奮して来た。

仕事どころではなくなって来た。

律子は藤崎君と付き合っているとは言え、ホテルには行っていない。
い。

まだキスして……。それはまあ、置いといて。

もう、藤崎君、どうして私に連絡くれないのよ？

今度は悲しくなって来た。

「は！」

気がつくと泣いていた。隣の席の新人女子が驚いて律子を見ている。

「先輩、どうしたんですか？」

「ああ、ごめん、何でもない。昨日見た映画を思い出して泣いちゃった」

うまく惚けたつもりだったが、新人女子は不審そうに仕事に戻った。

いかん、いかん！ 今は仕事に集中！

律子は妄想を振り払い、書類に目を向けた。

そしてお昼休み。

あまり仕事をした気がしない。

「律子」

今度は鬼刑事香が来た。

「今日はお弁当？」

「ううん、社食にしようと思ってる」

「じゃ、一緒に食べようか」

何か怖い。昨日の続きの尋問だろうか？ 律子は連行される容疑者のように香について行った。

「ねえ、朝、真弓と話してたみたいだけど、何？」

う。そっちな。律子は苦笑いして、

「あれえ、何だっけ。私、最近物忘れが激しくてさあ」

香の視線が冷たい。でも律子はそのまま押し切ろうと思った。

この様子では、香も藤崎君が寝込んでいたのを知らないのだ。

絶対に知られてはいけない。

「まあ、いいわ。プライベートな事なら、私が質問するのもおかしな話だから」

今日は香が鬼刑事モードにはならなくてホッとする律子。

「それよりさ」

香は声をひそめた。

「何？」

律子も声をひそめる。

「藤崎君、今日も来ていないでしょ？　どうしたのかしら？」

え？　香、本当に知らないの？　藤崎君で、結構いい加減？

「課長が知ってるんじゃないの？　無断欠勤なら、一番に怒り出すはずなのに、何も言わないでしょ？」

「あ、そうか」

香の反応を見る限り、彼女は本当に知らないようだ。

（私の思い違いだったのかな？）

藤崎君の本命は香だと思っていたのだが、真弓だったのか？

だとしたら、香が可哀相だ。

自分が可哀相なのはすぐに忘れる律子であった。

そしてお昼休みが終わり、仕事に戻る。

「課長」

午後は会議だと言っていた平井課長を呼び止めた香。

「どうした、香君？」

課長は時計を見ながら言った。

「藤崎さん、お休みですか？」

「ああ、そうだよ。あれ、言ってなかったかな？」

「ええ、聞いてませんが」

香の答えに、何故か課長は妙に焦ったようだ。

「あ、そ、そうか。いや、忘れてたのかな。そうなんだよ、熱が下がらないので、二、三日休ませて下さいと連絡があった」

「そうですか。ありがとうございました」

課長はまるで逃げるようにフロアを出て行った。

その不自然さに気づいたのは、名探偵律子だ。

鬼刑事香は、藤崎君が寝込んでいる事に驚き、自分に連絡をくれない事に悲しみを感じているのか、課長の行動の不自然さに気づいていないようだ。

律子は推理した。

何故課長は慌てたのか？

むむむ？ わからない。慌てていたのは事実だが、理由は皆目見当がつかない。

何故課長は慌てていたのか？

これは律子の人生で三番目くらいの謎だった。

よし、重要参考人に訊こう。

そう思って真弓の席を見ると、姿がない。

「あれ、真弓は？」

「真弓先輩なら、お昼で早退しましたよ」

新入社員の須坂君が教えてくれた。

ええ？ 逃げたか、重要参考人は。

それよりも。

「……」

香を見ると、とても悲しそうな顔で席に着いていた。

（ショックだろうなあ、藤崎君の事）

ああ！もしかして重要参考人は、またしても藤崎君のところに
行ったのか？

真弓の奴！

そして思い出す。

あれ？　そう言えば、真弓はどうして藤崎君の部屋に入れたの？

合鍵を持ってるの？　私は渡されてないのに！

改めて気づく。自分は本命ではないのだと。

悲しみがこみ上げて来る律子。

そして。

「今日は行くところがあるから」

香は暗い表情で帰って行った。

元気づけてあげようと声をかけたのだが、そんな心境ではなかったようだ。

律子は、藤崎君の事を思い出して、行ってみる事にした。

もし、真弓がいたら、それはその時の事だ。

律子が降りる駅の一つ手前が、藤崎君のアパートがある町だ。

何故かドキドキして来た。

この角を曲がると、アパートが見えて来る。

ああ！

曲がったら、見えて来たのは、アパートと香の後ろ姿。

（うわあ。香かあ）

真弓なら、構わずに行ってしまうがいいが、香だと話が違って来る。

律子は藤崎君に会うのを諦め、回れ右をした。

（香、くれぐれも修羅場にならないでね）

律子はそう思い、駅へと向かった。

「ふう」

思わず溜息を吐く。

「ああ！」

いきなり大声を出して、周囲の視線を一斉に受ける。

電車を乗り間違えた。また会社に向かってどうするのよ、全く！

我ながらオツチヨコチヨイ過ぎると思う律子。

次の駅で降り、反対のホームに行く。

「あれ？」

平井課長だ。どうしてこの駅で降りるのだろうか？

課長が住んでいるのは、律子の降りる駅より二つ先の駅なのに。

そして律子は驚愕の事実を知ることになる。

「ええ！？」

目を疑った。課長の後ろから、真弓が歩いて来たのだ。

二人は律子に見られている事には気づいておらず、そのまま改札を通過して出て行った。

(この駅、真弓が降りる駅でもない)

答えは一つしかない。考えたくないが、不倫。

謎は全て解けた。昔読んだ漫画の名セリフが頭に浮かぶ律子。

真弓と課長なんて、全然結びつかなかったけど。

どうしよう、明日。

普通に二人と接する事ができるだろうか？

不安な律子だった。

第五章 修羅場突入!

律子は慌て者でお調子者で、思い込みが激しくて涙もろくて怒りんぼのOLである。

要するに喜怒哀楽が激しい女なのだ。

昨日は、電車の乗り間違えに気づいて降りた駅で、偶然とんでもないモノを見てしまった。

不倫? 平井課長と、同僚の真弓が連れ立って改札を出て行くのを目撃ドキュンしてしまったのだ。

本場に「ドキュン」だった。心臓がバクバクして、階段を昇るのに一苦労だった。

その上、あまりにもその事が衝撃的で、何度も降りる駅を乗り過ぎ、とうとう終電まで乗り続けたほどだ。動揺し過ぎである。

(どうしよう? どんな顔して真弓に会えばいいんだろう?)

香に相談してみようか? でも、それだとあの話もしないといけないし、どうして電車を乗り間違えたのかを尋ねられると、藤崎君のところに行こうとしていた事がばれそうだし。

律子はパニックになりかけていた。そして結局一睡もしないままで、翌朝を迎えてしまった。

「うろう」

彼女の一つだけ良いところを挙げるとしたら、そんな状態でも会社には行こうとする心構えである。

「ねぶい……」

瞼がくつつきそうになるのを必死に堪えながら、律子は電車に乗った。その必死な顔に周囲の乗客が引き捲っていたのを知らない律子である。

「おはよう」

律子は香に声をかけた。昨日はどうしたのだろうと考える余裕す

らない。すでにヘロヘロである。

「どうしたの、律子？ 飲み過ぎ？」

優しい香は、心配してくれた。

「あはは、違うの。眠れなかっただけ……」

「その方が大変だよ。何があったの？」

「まずい、と思ったが、すでに遅かった。」

「彼とうまくいってないの？」

香が小声で尋ねる。律子は目を半開きにして、

「そうじゃないの。でも、大丈夫だから……」

と言いながら、自分の席ではなく、新入社員の須坂君の席に着き、眠ってしまう。

「先輩、困りますよ！ ここ、僕の机ですから！」

須坂君が必死に律子を揺り起こすが、律子はまさに泥のように眠っていて起きない。

「香先輩、助けて下さいよお」

須坂君は、香に救いを求めた。

「仕方がないわね、律子は！」

香は腕組みをして傍観していたが、須坂君の「母性本能攻撃」によって動き出した。

「ほら、律子、起きなさいよ。須坂君が困ってるでしょ！」

「うーん……」

律子はムクツと起きた。

「須坂君、私の事、好きなの？」

「はあ？」

突然おかしな事を言い出す。香も呆気にとられて何も言えない。

「先輩、しっかりして下さい。ここ、会社ですよ！」

須坂君は多少動揺しているようで、顔を赤らめている。

「わかった、会社終わったら、ゆっくり話そうね」

律子はニヘラーツとして、フラフラしながら自分の席に向かって歩き出した。

「大丈夫なんですかね、律子先輩は？」

須坂君は不安そうだ。香は肩を竦めて、

「そのうち復活すると思う」

「そうですかあ？」

香は自分の席に行った。須坂君は溜息を吐いて椅子に座る。

（律子先輩の座った後だから、温かい）

何故かドキドキしてしまう須坂君である。

律子はお昼休みになる頃には半分意識がしっかりして来て、仕事をこなしていた。

（そう言えば、課長はどうしたのかな？ 真弓もいないぞ）

それは律子にはありがたかったが、二人揃っていないのはちょっと怖い。

（もしかして、別れ話がこじれて……）

妄想タイムだ。その手の小説の読み過ぎである。

「係長」

近くを通りかかった梶部係長かじぶに声をかける。

「どうした、律子君？」

係長は酒乱の律子に宴会で「襲われた」事があるので、ちょっと彼女が苦手だ。

「課長はお休みですか？」

「ああ、風邪だとか言ってたな。藤崎もそうらしいし」

「そうですか」

ホッとする律子。あれ？ もう一人いなかったな。

「真弓はどうしたんですか？」

「真弓君は連絡がないよ。何度か携帯にかけてるんだが、出ないんだ」

係長は律子が考え込んだのを幸いと、サッと逃げてしまった。よほどトラウマなのだろう。

（平井課長が風邪？ あの課長が？）

真冬にパン一で寝ているとか豪語していた課長が、風邪？　あり得ない。

それから、真弓。心配だ。何かあったのだろうか？　気になる。

「律子」

香が後ろから声をかける。

「キャッ！」

思わず叫んでしまう。

「何よ、失礼な。どうしたの？」

「な、何が？」

先走って余計な事を喋らないように、香の訊きたい事を確認する。

「課長がいない事を気にするなんて、おかしいなって思ったのよ」

「どうして？」

焦る律子。香はニツとして、

「宴会で、係長と部長にはキスを迫ったのに、課長には迫らなかったでしょ？　ああ、律子、心の底から課長が嫌いなんだって思ったの」

「えええ？」

律子には、その件くだりについての記憶は一切ない。衝撃の事実であった。

「まあ、後は署の方で伺いましょうか」

鬼刑事香の復活だった。

社員食堂に「連行」された律子は、香捜査官の厳しい尋問を受けていた。

「課長が休みなのを気にするのは何故？」

いきなり核心に迫る尋問である。容疑者律子は顔を強張らせた。

「それは、そのお……」

先日のお惚け作戦は通用しない。律子は諦めて自白する事にした。香を藤崎君のアパートの前で見た事や、自分が藤崎君に会いに行った事は隠して。

「……」

香は驚愕していた。しばらく二人共何も言わない状態が続いた。やがて香が口を開く。

「間違いないの、それ？」

「うん。只、二人が一緒だっただけで、ホテルに入るのを見た訳じゃないから」

「そうよね。そこまで決めつけるのは良くないけど、でも状況がねえ」

香はアゴに手を当てて考え込む。

確かに、昨日の二人の様子を思い出すと、それが正解の気がしてしまう。

藤崎君は課長に休みの連絡を入れた。課長は何故かそれを課のみに話すのを忘れた。

それなのにどういう訳か、真弓は藤崎君が風邪で休んだのを知っていた。

そして、香が課長に藤崎君の事を尋ねると、課長は酷く動揺した。同じく、真弓も藤崎君の休みを何故知っているのか問い詰めた時、動揺していた。

課長が藤崎君からの連絡を受けた時、そばに真弓がいたとしてもそれほど動揺するのは妙だ。

受けた場所が問題？ それとも、時間？

どちらにしても、平井課長と真弓の関係は、限りなく黒に近いグレーである。

但し、律子は香に、真弓が藤崎君のアパートに行った事は話していない。全てを知っているのは、律子だけだ。

「とにかく、この事は誰にも話さないでね。私ももう忘れるから」
「うん」

律子は香に話した事で気が緩んだのか、食事をした事でそうなったのか、午後はまた睡魔との闘いになった。

「先輩！」

隣の新人女子が、船を漕いでいる律子を揺すった。

「ああ、ごめん」

律子はハッとして目を開ける。係長が睨んでいた。でも律子が見ると、スッと視線を外す。

（何よ、文句があるなら、面と向かって言えってえの！）

ムカムカしたので、睡魔が消えた。律子は席を立ち、コーヒーを入れに行く。

「はい、先輩」

どうした事か、須坂君がコーヒーを入れてくれた。

「あ、ありがとう、須坂君」

ニコツとして礼を言くと、須坂君は照れたように笑い、自分の席に戻って行く。

（ああん、何か可愛い、今日の須坂君てば）

朝の出来事を全く覚えていない律子である。

そして。

「真弓、連絡とれた？」

香に尋ねる。香は首を横に振り、

「留守電にもならない。メッセがいっぱいなのかも」

「ふーん」

律子と香は、真弓のアパートに行ってみることにした。

「何か怖いんだけど」

律子の推理小説好きに呆れる香であった。

「何もないわよ。きっと寝込んで、連絡できないのよ。そんな小説を読んだ事あるから」

「どんな小説？」

妙な事に関心が向く律子。香はムツとして、

「それはどうでもいいから！」

「はい」

こうして二人は真弓のアパートへと旅立った。というのは大袈裟

だが。

「鍵がかかってたら、入れないわね」

律子が言うと、

「真弓は合鍵をプリンターの下に入れてあるから、大丈夫よ」

香は抜け目がない。さすがである。

「でも、どうしてそんなところに鍵を入れておくの？」

「鍵を落とした時困らないようによ」

「なるほど」

あ！もしかして、真弓の奴、藤崎君のアパートの鍵の在り処を知っていて、部屋に入れたのかな？

真弓のアパートは、律子のアパートとは逆方向の電車に乗る。会社の最寄り駅から三つ先だ。

「寂しいところね」

律子は真弓のアパートには行った事がない。香が行こうと言い出さなければ、検索サイトで探そうと思っていた。

「あの派手な真弓からはイメージできないようなアパートよ」

「そうなの？」

何か楽しみになって来た。律子のアパートもそれほど洒落ではないが、いつもキラキラしている真弓のアパートが風呂なし共同トイレなら、何となく嬉しい自分がいる。

「ここ」

到着した。でも、アパートは律子のアパートより新しい。確かに真弓のイメージとは違って、地味な建物だが、風呂なしではなさそうだ。

「二階よ」

香が外階段を昇る。律子も慌てて続いた。

「一番奥の二〇五号室」

外廊下の終点に、小さめの白いプリンターが見えた。

「まずはこっちよ」

いきなりプリンターを覗こうとして、香に窘められた。たしな香がドア

フォンを押す。

しばらく待つが、案の定、返事がない。

「はい」

嬉しそうにプランターの下から鍵を取り出して差し出す律子。

「ありがとう」

その素早さに呆氣に取られながらも、鍵を受け取る香。

ガチャッと鍵が開く。香はゆっくりとドアノブを回し、引いた。

キーッと小さい音がして、ドアが開く。思わずゴクリと唾を飲む律子。

「真弓？ いるの？ 大丈夫？」

玄関に真弓の仕用の靴があった。どうやらいるようだ。香は手探りで明かりのスイッチを押した。途端に「現場の惨状」が明らかになった。シンクには汚れたままの皿が積み上げられている。律子は自分の部屋にいるような気がして来た。

「上がるわよ」

香、律子の順で、キッチンに上がる。ガラス戸で仕切られた向こうに真弓は寝ているのだろうか？

「真弓？」

香がガラス戸を開いた。キッチンの明かりが中を照らし出す。

「おお」

そこには洗濯物らしきものの山があり、部屋の隅から隅へと渡されたロープに数えきれないほどのハンガーが下げられていた。そして部屋の中央に、まるで芋虫のように布団を被って寝ている真弓がいた。中は空気が澱んでいて、病気になるようだ。香はカーテンを引き、窓を開いて空気を入れ替えた。

「真弓、大丈夫？」

「フゴ？」

ようやく真弓は目を覚ましたようだ。

「香？ 律子？」

彼女はビククリして飛び起きた。上下スウェットで、髪がボサボ

サの上、化粧をしていない真弓は、別人のようだった。

「ど、どうしたの、一体？」

「どうしたのって、貴女が無断欠勤したから」

「え？」

真弓はキョトンとしている。そしてようやく記憶の混濁が収まった。

「わああ！」

枕元の目覚まし時計を見る。

「全然目が覚めなかった……」

真弓は落ち込んでしまった。香は呆氣に取られていた。

「今までずっと寝てただけなの、貴女？」

香の質問に、項垂れたままで頷く真弓。何だ、病気じゃなかったんだ。ホツとする。

「何かあったの、昨日？」

香は他意がある訳ではなく、そう尋ねた。

「な、何で？」

今、ビクツとした。やっぱり何かあったんだ。律子は興味津々で

真弓を見た。

「真弓が寝過ごすなんて、今までなかったから」

「ああ」

真弓はボサボサの髪を手で梳かしながら、

「ちよっと昔の知り合いに会って、遅くまで飲んだのよ。それで起きられなかったの」

と明らかに嘘とわかる事を言った。酒の匂いなんて、この部屋には全くしていない。

「そうなの」

香も、真弓が嘘を吐いているのをわかっているから、視線が冷たい。

「病気じゃなくて良かったわ」

香は窓を閉めてカーテンを引くと、

「帰るわね」

と律子に目配せした。律子はオタオタしながら、

「あ、うん」

真弓は、いきなり現れて、サッサと帰って行く二人を、呆然としかたまま見ていた。

「黒ね」

アパートの階段を降り切ったところで、香が呟いた。

「そうね」

律子も同意した。

「でも、何があったんだろう？」

香は歩き出して言った。律子はそれを追いかけて、

「こうなって来ると、課長が風邪で休みっていうのも、怪しいわね」

「そうね。もしかして、奥さんにばれたのかしら？」

それは怖い。怖過ぎて考えたくない。今頃平井課長は……。

「何を妄想してるの、律子？」

震え出す律子に、香の冷静な突込みが入る。

「とにかく、真弓が病氣じゃなくて良かった。それだけにしときましよう」

香捜査官は事件の終結を宣言した。律子は不服申し立てをしたかったが、できなかった。

「次の現場に向かいましょうか」

香捜査官は、律子を見て言った。律子は恐る恐る、

「え？ 次の現場？」

「ええ。次の現場よ」

殺される？ ついそう思ってしまった律子である。

私の嫌な予感は良く当たる。

律子はそう思って溜息を吐いた。

二人が向かったのは、何と藤崎君のアパート。

律子は心臓が口から出そうなくらいドキドキしている。

「あ、あのさ」

「質問は後で受けます」

前を歩く香は、何者も寄せつけないようなオーラを漂わせていた。
(やっぱり殺される?)

またそう思ってしまう律子。

「知ってるのよね、この先に藤崎君のアパートがあるのを？」

香は前を向いたまままで尋ねる。律子は一瞬惚けようと思ったが、それは死を意味するかも知れないと思い、

「うん」

「やっぱり」

やっぱり? どういう事? 昨日何があったのよ? もしかして、香はここに来るのが本当の旅の目的だったの? 嫌な汗が背中を伝う。

そしてとうとう藤崎君のアパートの前に着いてしまった。足が震え出す。

「さ、入りましょう」

香は徐にバッグから鍵を取り出した。

(合鍵!)

ショックだった。藤崎君は、私には渡してくれていないのに……。

「冬矢君、起きてる?」

香が部屋の奥に呼びかける。うわ、冬矢君だって。名前で呼んでるんだ。更にショックの律子。

「あ、香さん?」

奥から掠れた藤崎君の声がした。香は躊躇なく靴を脱いで奥へと行く。律子も慌ててそれを追う。

「あ!」

布団から起き出した藤崎君は、律子と一緒になのに気づき、仰天していた。律子は気まずくて、藤崎君を見られない。

「りったん、どうして……」

そう言ってしまうてから、藤崎君は香がいるのを思い出し、ギク

ツとした。

「ふーん、りったんて呼んでるの」

香の冷たい声がグサツと胸に突き刺さる。

「香さん、これは一体どういう事？」

藤崎君は香に問い質した。香は藤崎君を見て、

「昨日もそうだったわ。私が来たのに、『律子さん？』って言ったわ」

藤崎君は蒼ざめている。

「いや、その、一昨日看病しに来てくれたから、律子先輩だと思つて……」

「看病？」

香と律子は異口同音に叫んだ。香が律子を睨む。

「どういう事、律子？」

それは私が訊きたい。藤崎君、真弓と私を間違えてる。でも、それを言ったら真弓を巻き込んだんじゃうし。

「僕が寝込んでいるのを聞いて、見舞いに来てくれたんだよ。それだけだよ」

どうしよう？ このままじゃ、大変な事になりそう。藤崎君のその言葉に、香は気づいてしまったようだ。

「冬矢君、それ、律子じゃなくて、真弓よ」

「え？」

うわあ。参った。真弓も当事者の仲間入り。

「『りったん』っていう呼び名を聞くまでは、律子が貴方に遊ばれていると思ってた。律子をこれ以上騙さないでと言うつもりだったわ」

香はまるで雪女のように冷たい目で律子と藤崎君を交互に見た。

「遊ばれていたのは、私の方だったのね」

香の目から、大粒の涙がポロポロと零れた。

「香さん」

藤崎君が何かを言おうとした時、香は、

「さよなら！」

と叫び、部屋を飛び出してしまった。

「香！」

律子はすぐに香を追いかけた。誤解。誤解よ！ 私は藤崎君に合
い鍵も渡してもらっていないんだから！

律子は香を追いかけたが、香は信じられないくらい速くて、全然
追いつけず、駅に辿り着いた時は、すでに電車に乗って去って行く
ところだった。

「どうしよう？」

律子は途方に暮れた。

そして、今相談できるのは一人しかいないと思い、藤崎君のアパ
ートへと歩き出した。

エピローグ 全部まとめて解決致します！

律子はOL。とても慌てん坊で、そろっかしい事この上ない。

同僚の香と共に訪れた、現在お付き合い中の藤崎君のアパート。当然の事ながら、ドロドロな展開になってしまった。

走り去った香を追いかけるも、体力知力共に自信がない律子は、たちまち突き放され、香は車中の人になった。

他にどうしようもないじゃないか。某SFアニメの名セリフを思い浮かべながら、律子は藤崎君のアパートに戻った。

「りったん」

中に入ると、藤崎君がゲホゲホと咳き込みながら、キッチンに現れた。

「ああ、寝てないと！」

律子はふらつく藤崎君を支えて、布団に連れて行く。

「どうして？」

「え？」

いきなりの律子の問いかけに戸惑う藤崎君。

「どうして香に連絡してあげなかったの？」

「な、何をさ？」

藤崎君は横になりながら尋ね返す。律子は憤然として、

「病気になった事をよ！ 香、課長に教えられて、ショック受けたわ」

「そうなんだ……」

藤崎君は病気で体力が落ちているせいか、いつもより弱々しく見え、律子の叱責にも酷く落ち込んでるように感じられた。

「香は真面目な子なんだから、中途半端な気持ちで付き合ってはダメよ。そういうのは、私と真弓で十分でしょ」

律子は俯いて嫌味を言った。気持ちをしっかり持たないと泣きそ

「付き合うって……。僕は香さんと付き合ってるつもりはないよ」

「ええ？」

律子は藤崎君のその返事に仰天した。

「だって香、合鍵まで持ってた……」

「あれは、香さんが勝手に作ったんだよ。僕が渡した訳じゃないよ」

律子は頭がクラクラして来た。今になって、徹夜明けが身に応える。

「でも、香は付き合ってると思っていたのよ。貴方がそう思わせる態度を取ったんでしょ！」

律子は藤崎君をキツとして見た。香の気持ちを思うと、藤崎君の態度は到底許せるものではなかった。

「確かに香さんには、『付き合ってた下さい』って言われたけど、僕は返事してないんだ。そしたら、いつの間にか、付き合ってるような感じになってさ……」

「あのねえ……」

藤崎君のあいまいな態度が、香を誤解させた。香も悪いかも知れないが、はっきり言わない藤崎君も悪い。律子はムカムカして来た。

「ごめん」

藤崎君が突然起き上がり、律子をグッと抱きしめた。

「やだ、ちょっと、何よ！ 私にじゃなくて、香に謝りなさいよ！」
もがいて、藤崎君から離れる。心臓の鼓動が、彼に聞こえてしま
うのではないかというくらい大きい。

「僕は、りったんと付き合ってるつもりだよ」

藤崎君は、寂しそうな顔でポツリと言った。

「な、何言ってるのよ！ 私だって、合鍵もらってないのよ！ ふざけた事言わないで！」

律子が大声でそう言うと、藤崎君は溜息を吐いて、

「やっぱり覚えていないんだね」

「へ？」

ギクツとする律子。藤崎君は律子を真っ直ぐ見た。

「僕らが初めて話した時って覚えてる？」

「新入社員歓迎会でしょ？」

律子は恥ずかしそうに答える。藤崎君は力なく微笑んで、
「そう。あの時、何だか知らないけど、りったんと僕、意気投合してたよね」

ああ、そんな事があったっけ。それで、私は勘違いして、藤崎君が自分に気があると思ってしまったんだ。律子にとっては、封印したい「黒歴史」だ。

「それから、何度か飲み会で語り合ったりして、初めて二人でデートしたのっていつだったかな？」

「部長のお誕生日会の時」

律子は恥ずかしいので藤崎君に背を向けて答えた。

「その時はお互い、随分飲んだよね」

「そ、そうね」

モジモジし出す律子。藤崎君はその様子を見てクスツと笑い、
「その時、りったんが『部屋に遊びに行きたい！』って言い出したので、僕はスペアキーを渡したんだけど」

あああああ！ 思い出した！ 確かに鍵を受け取った！ でも、全然記憶になかった。言われるまで、忘れてた。で、その鍵は今どこにあるんだろ？ 想像するだけで恐ろしい。

「ご、ごめん。私、すっかり忘れてた」

律子は藤崎君を見て頭を下げた。藤崎君は苦笑いをして、

「そんなに謝らないでよ。あの状況で渡した僕も悪いんだから」

優し過ぎるわ、藤崎君。律子はメロメロになりそうだった。

「だから、僕が付き合ってるのは、りったんなんだよ」

改めてそう言われて、いろいろと自分で妄想してしまい、別れようとしたり、また付き合おうとしたりした事を恥じた。

「あ」

「何？」

ふと思いつく。

「じゃあ、どうして真弓は部屋に入れたの？ あいつにも合鍵？」
「ああ、それは違うよ。あの日は僕、本当に辛くて、誰が来たのかもわからなかったんだけど、その人が言うには、鍵がかかっていなかったらしいんだ。言われてみれば、鍵を出した記憶がなかったの
で、ああそうか、と思ったんだけど」

なるほど。辻褄は合う。

「それに、僕はてっきりりったんだと思ったから、他の誰かなんて考えもしなかったよ」

「危ないよ、ホントに。入って来たのが真弓だったから良かったけど」

「そだね」

ニコツとした藤崎君の顔をまともに見られない律子。

「僕の潔白は証明されましたか、りったん検察官様？」

藤崎君のジョークにも反応できないくらい、律子は恥ずかしかった。

「でもさ」

藤崎君は言った。律子は居ずまいを正して彼を見る。

「何？」

「どうしてすぐに来てくれなかったの？ ずっと待ってたんだよ」

「うわー、そのセリフ、今言いますか？ 律子は倒れそうだったが、

「課長がね、教えてくれなかったのよ」

「どうして？」

「どうしてって……」

この話はしない方がいい。律子はそう判断し、

「課長が忘れたの」

藤崎君は笑って、

「それは仕方ないね。でも、りったんの携帯にもメールしたはずだけど」

「えええええ！？」

慌てて携帯を見る。しかし、着メールはない。

「ないよ」

「え？ そうなの？ おかしいなあ」

藤崎君は自分の携帯を調べる。

「あ、ごめん、間違えて姉貴に送信してた。姉貴も律子なんだ」

「ふーん」

お姉さんと同じ名前かあ。何かプレッシャーだ。それも、もしかして私の方が年上？

「悪い偶然がいっぱい重なったんだね」

「そうみたい」

間近で見つめられると、まともに顔を見られない。

「でさ」

「何？」

ピクンとしてしまう。

「心細いから、このまま一緒にいて欲しいんだけど」

「え？」

この甘え上手めえ！ やっぱお姉さんがいる男は、年上キラーなんだね。

「ダメ、かな？」

熱で潤んだ眼で攻撃されたら、さすがに耐えられない。

「い、いいよ」

そこまで言ってしまったから、律子はハタと気づいた。

「ダメダメ、香と話さないうちは、そんな事できない！」

藤崎君は残念そうだったが、

「そうだね。僕も香さんに謝らないと」

「そうよ。香を泣かせる奴は、許さないんだから」

律子がそう言うと、藤崎君は笑って、

「親友なんだね」

「そう。戦友でもある」

香とは同期入社で、あらゆる事を共に乗り越えて来たのだ。まさに戦友と呼ぶのが相応しい。

律子は近所のスーパーに走って食材を買い込み、体力回復のための栄養満点料理を作って藤崎君に食べさせてから、後ろ髪を惹かれる思いで部屋を出た。

（私が本命……）

つい、ニヘラーツとしてしまう。

（とにかく、明日香と話さないと。藤崎君が出て来られれば一番なんだけど）

でもさっきの様子では、明日も無理だろう。

（やっぱり泊まって看病するべきだったかな？）

そんな事を考えてしまう。

「はあ」

溜息を吐くたびに幸せが逃げるって、真弓が言ってたけど。吐くなど言う方が無理。明日、どんな顔して香に会えばいいの？ あまりの展開に、律子は精神崩壊してしまいそうだった。

そして翌日。どんな顔をして、と思っていたが、香は休みだった。平井課長も休みなのはちよつとビックリした。

「どうしたのかな、香？」

今日は出勤の真弓がボソリと言う。律子は顔を引きつらせて、

「どうしたのかしらね……」

とだけ言った。

（ダメーじ大きいんだろうなあ。香って、負け知らずで生きて来たっばいからなあ）

香はお嬢様だ。結構なお金持ちの家。父親は会社の経営者で、母親は経営コンサルタント。しがないサラリーマン家庭の律子とは、スタートラインが違っている。しかし、彼女は微塵も「お嬢様」ぶった態度がなく、本当に良い子なのだ。だから余計に心配だった。（どうすればいいんだろう？）

その時、「真弓に相談」という選択肢が思い浮かんだ。でもそれ

も危険だ。二次遭難の恐れがある。

そんな事を考えていると、向こうから接触して来た。

「律子、今夜ちょっと付き合ってくれない？」

「え？ どうしたの？」

律子の問いかけに、真弓は苦笑いをして、

「ちょっとね」

とだけ答えた。

（また難しい事じゃないでしょうね？）

律子は憂鬱になって来た。

そしてお昼休みも終わり、本日の業務は後半戦に突入した。

「先輩、コーヒーどうですか？」

須坂君が昨日に引き続いて何故か優しい。どうしたのよ、須坂君

？ 今は貴方に何をされてもなびかないんだから。それでも男子に優しくされるのは悪い気はしない。

「ありがとう、須坂君」

「へへへ」

妙に可愛い笑顔で律子を見ている須坂君。一体彼に何があったのか、律子は不思議だった。

（何か言っちゃったのかな、私？）

最近飲み会の記憶がない事が多いので、またおかしな事を言って、須坂君を知らないうちに翻弄しているのかも知れない。これは確かめる必要がある。

「ねえ、須坂君」

「はい」

須坂君はニコニコして近づいて来る。人なつこい小型犬みたいだ。

「私さ、何か須坂君に約束でもした？」

「は？ 別にそんな事ないですけど」

須坂君はキョトンとして律子を見ている。

「最近、須坂君、気が利くなと思ったから。違うのなら、いいの」

「そ、そうですか」

あれ？ 今度は急に暗くなったぞ？ 一体どういう事だ？ これだから若い男はわからない。だが、今はそんな事で悩んでいる暇はない。香との話をどうすればいいのか、そして今夜の真弓の「付き合って」はどんな内容なのか？ 凄く考えてしまう。

いろいろ余計な事があったけど、仕事は滞りなく終わり、時間になった。

「律子」

逃亡するとも思っただのか、真弓は定時になるとすぐに律子に張りついて来た。

「何？」

「一緒に来て」

真弓はかなり強引だった。律子の返事も待たないまま、彼女は律子を引き摺るようにしてフロアを出て行く。

「律子せんぱーい」

寂しそうにそれを見送る須坂君。

「逃げないから、手を放してよ、真弓」

律子は外に出てもくっついて離れない真弓に言った。

「ホント？」

「本当よ」

「了解」

ようやく解放された律子は、

「で、何？」

「取り敢えず、何か食べながら話しましょうか」

真弓は律子を伴い、駅前の居酒屋に入った。

「生中二つね」

何も聞かずに勝手にオーダーするところはいつもの真弓だ。

「それで？」

もう一度尋ねる。真弓はようやく、

「貴女、この前、駅で私と課長が一緒にいるところを見たでしょ？」

律子はもう少しで椅子から転げ落ちるかと思うほど驚いた。

「視界に入ったのよ、貴女によく似た人が」

「……」

律子は固まったように動かない。真弓は続けた。

「で、課長と歩きながら、私はホームの方を見たの。そしたら、酔っ払った貴女が歩いているのが見えたわ」

酔っ払ってはいなかったが、相当なショックを受けて、フラフラ歩いていたのは確かだ。

「はい、生中お待ち」

店員がジョッキを二つテーブルに置いた。

「はい、まずは乾杯ね」

「う、うん」

真弓は、律子が見ていた事を咎めようとしているのではないらしい。

「かんぱーい」

ジョッキをカチンとさせ、二人はゴクゴクとビールを飲んだ。

「うーん、うまい」

「そ、そうね」

真弓は開き直っているのだろうか？ 何か吹っ切れたような雰囲気漂わせている。

「貴女は私と課長の事をどんな風に思っているの？」

真弓は真っ直ぐな目で律子を見ている。

「どんな風になって、その……」

「不倫していると思ったでしょ？」

真弓は悪戯っぽく笑った。律子は気まずそうに、

「う、うん……」

と答えた。真弓は笑ったままで、

「もう二年になるの」

「ええっ？」

意外だった。そんな前からの？　それなら、課長が係長の時からじゃないの。

「別にいい男でもないし、一緒にいても楽しくないんだけど、何となく続いちゃったのよね」

真弓はそう言うと言ったジョッキのビールを一気に飲み干した。

「あの日はね、別れ話を切り出したの」

「別れ話？」

律子が鸚鵡返しに言うのと、

「生中もう一つと、唐揚げセットと、揚げ出し豆腐と、ホッケ下さ
い」

真弓は通りかかった店員にオーダーした。そして律子を見る。

「そう。もういいやって、思ってたね。課長、最初は奥さんと別れる
って言ってたんだけど、そのうちそんな事はできないって言い出し
て、じゃあ別れましようって私が切り出したら、逆ギレした時があ
ってね」

あの平井課長が逆ギレ？　想像がつかないけど、ああいうタイプ
が切れると一番始末が悪そうだ。

「でもあの日は、課長も私がお昼で早退していたから、結構何か感
じるものがあつたらしくて、抵抗しなかったわ。でもね、その冷め
た態度に今度は私がムカついて、つい殴っちゃったの」

「ええ？」

うーん、凄い、真弓。仮にも上司なのに。

「それで？」

「何よ、楽しそうね？」

律子は興味津々の顔になっていたのを真弓に呆れられた。

「ごめん」

すぐに反省する。

「まあ、いいけどね」

真弓は生中を受け取り、ゴクリと一口飲んだ。

「気持ち良かったわ。課長のテンプルにガツーンて入ったのよ」

ああ、そう言えば、何年か前、真弓はボクササイズにはまっていた。それはそれは、平井課長は本当に御愁傷様だ。相当痛かったろうな。

「それで課長、まだ休んでるんだ」

「多分ね。顔が腫れてると思う」

真弓は愉快そうに笑った。

「大丈夫なの、訴えられたりしない？」

律子が心配して言うのと、

「訴えられる訳ないでしょ？ そんな事したら、どうして私に殴られたのか、全部裁判で明らかにされちゃうもの」

「ああ、そうか」

確かに課長にメリットはない。二度目の御愁傷様だ。

「奥さんにさえ、本当の事は言えないでしょうしね」

真弓はニヤツとした。

「でも、課長が復帰したら、真弓居辛くないの？」

律子が核心を突く質問をすると、真弓はニツコリして、

「ああ、私、明日辞表出すの」

「ええっ！？ そんな事で辞めなくても……」

律子が驚いて言うのと、真弓は笑って、

「違う違う。それで辞めるんじゃないわ。辞めようと思って、別れ話を切り出したんだから」

「そうなんだ」

真弓は急にしんみりして、

「田舎の父がね、具合が悪いの」

「……」

律子は言葉がない。そういう深刻な話は苦手だ。

「昨日は、そんな事があっていろいろ考えていたら、眠れなくなつて、布団に入ったのが明け方近くだった。だから、貴女と香が来るまで寝ちゃったの」

「真弓……」

律子は涙ぐんでしまった。真弓はそれに気づき、

「何よ、律子。泣かないでよ。私までそんな気がしちゃうじゃない」

「ご、ごめん」

律子は涙を拭った。

「生中、もう一つね」

真弓がすかさずオーダーする。

「今日は付き合ってよね、律子」

「うん」

結局二人は、終電まで居酒屋で飲み明かし、最後は勝鬨^{かちどぎ}をあげ、解散した。

律子は、香の事を相談しようと思ったが、会社を明日去る真弓にする事ではないと思い、諦めた。そして、真弓が何故藤崎君のところにいったのかも訊けなかった。

（寂しくなるな、会社も）

華やかな真弓が去ると、まさに火が消えたようになる。休んでいた時でさえ、男子達は落ち込んでいる連中が多かったのだから。

そして、よもやとは思うが、香までいなくなったら、本当に困る。

（お願いだから、明日は出て来て、香）

律子は強く祈った。

藤崎君に連絡しようかと思ったが、時間が遅いので諦めた。

（明日は出て来られるかな？）

もし彼が来たら、三人で話そう。律子はそう思い、アパートに向かった。

そして、翌日。

律子はドキドキして出社した。

ところが、藤崎君は来ていたが、香はまた休みだった。平井課長も来ていない。

「おはよう」

藤崎君はすっかり復調したようで、元気な笑顔だ。律子は安心した。

「良かった、元気になって」

「りったんの料理が効いたんだよ」

藤崎君は小声で言った。律子はドキッとした。

「でも、香さん、来てないみたいだね」

「うん。ダメージ大きいのかも……」

律子がそう言うと、藤崎君は、

「責任感じてます」

「ホントよ」

小さく手を振り合ってお互いの席に着く。そこへ梶部^{かじぶ}係長が、真弓を伴って現れた。

「みんな、仕事を始める前にちよつといいかな？」

係長の話は、真弓の退職の件だった。正式な退社は、今末日だが、真弓は消化していない有給休暇を使って、今日で出勤は終わりにするという。律子以外の全員が、驚いていた。特に真弓を密かに狙っていた男共は、衝撃を受けたようだ。

「真弓君の仕事は、主に律子君と香君で分担していたから、二人にお願いするとして……」

その時係長は、香が休んでいる事に気づいた。不安でいっぱいな目で、律子を見る。

（何なのよ、その目は！）

律子は係長のテンブルにコークスクリューをぶち込みたくなった。

「じゃあ、真弓君から」

係長は真弓を促し、一歩下がった。真弓はいつになく緊張しているようだ。

「こんな形で、皆さんとお別れするのは大変残念です。ご迷惑ばかりかけていた私でしたが、今まで本当にありがとうございました」
真弓は薄らと涙を浮かべ、お辞儀をした。女子社員の何人かかも

らい泣きしている。律子は昨日知らされていたので、それほど悲しくならないと思っていたが、真弓が涙ぐんでいるのを見て、やっぱり悲しくなった。

「元気でね、真弓」

「いつでも戻って来いよ」

「残念だよ」

皆、口々に真弓に声をかけた。真弓は一通り同僚達の間を巡り、最後に律子のところに来た。

「香がないのが残念ね」

律子が言うと、真弓は、

「香がいたら、私もっと泣いちゃったろうから、ちょうど良かった」と言った。

「藤崎君とうまくやってね、律子」

お互いに抱きしめ合った時、耳元で言われた。律子はギクツとして、

「ど、どうして？」

「この前、藤崎君のところにお見舞いに行った時、彼、私の事をずっと律子だと思っていたのよ。妬けたわ、あの時は」

真弓がニコツとした。律子は顔が真っ赤になるのを感じた。

「じゃあね。元気でね」

「メールくらいちょうだいね」

「うん、もちろん」

真弓は係長に伴われて、フロアを出て行った。部長に挨拶に行くようだ。平井課長が休んでいるので、係長は大忙しだ。

「寂しくなりますね、先輩」

須坂君がまたコーヒーを入れてくれた。

「そうね。ん？ 須坂君で、コーヒー係なの？」

律子は最近コーヒーつながりの彼に尋ねた。須坂君は、

「べ、別にそういう訳じゃないですよ」

と言うと、サッサと席に戻って行く。

「よくわからんな、あいつ」

律子は首を傾げて呟いた。

お昼は社員食堂。端のテーブルで一人で食べていると、

「相席、いいですか？」

と藤崎君が来た。

「え、ああ、どうぞ」

律子はビックリしてオロオロしてしまった。皆が二人を見ている気がする。

「あのね」

藤崎君が小声で切り出した。

「社内恋愛は禁止されてないんだから、隠すの終わりにしようよ、りったん」

「え？」

それは……。律子は言葉が出ない。確かにそうなんだけど、藤崎君と付き合っているのが知れると、業務に支障が……。

「りったんが嫌なのなら、やめるけど」

「嫌って言うか、その、もう少し待って」

「いいよ」

藤崎君の笑顔。これに落ちてしまったのだ。改めて自分は落ちやすい女だと思った。

何でお昼ご飯食べるのにこんなに緊張しなくちゃならないのよ！誰のせいでもない。自分のせいである。

「藤崎さん、ちょっといいですか」

食堂を出ると、藤崎君は何故か須坂君に呼び止められた。

「何？」

二人は廊下の隅へと歩いて行く。律子はそれを見ていたが、やがて歩き出した。

そしてその日の業務は、何事もなく終了。律子は藤崎君に声をか

けて、香との話の対策を練ろうと思った。

「あれ？」

藤崎君がいない。携帯が鳴る。藤崎君からのメールだ。

「今日は急用ができたので、先に帰ります」

何ーッ!? 何とかポコではないが、杵で餅を突きたくなった。

「どういう事よ！」

律子がムカムカしながらエレベーターを待っていると、

「先輩」

とコーヒーマーカー須坂君が現れた。

「何？」

ちよつとムカついていたので、怖い顔で須坂君を見てしまったらしい。彼はビビッていた。

「あ、あの、今夜、時間ありますか？」

「へ？」

律子は唐突な質問にキョトンとしてしまった。

うーん。律子は何かヘンテコリンな気持ちだった。

(どうして私、須坂君と一緒にいるの?)

二人は、夜の遊園地に来ていた。須坂君は律子にデートを申し込んだのだ。

「何かの予行演習？」

我慢できなくなって訊く。須坂君は律子を見て、

「どうしてですか？」

「だって、君、同期の蘭子ちゃんが好きじゃなかったの？」

「え？」

何故それを、という顔で律子を見る須坂君。私は何でも知ってるのよ、という顔をする律子。

「私を練習台にするつもりなら、なってあげてもいいけど、蘭子ちゃん、遊園地なんか来たがらないと思うよ」

律子はアドバイスのつもりでそう言ったのだが、

「ち、違いますよ。彼女には先月はつきり断られました」
「そうなの？」

あらま、それは古傷を突いてしまつて申し訳ない。でも、だから私っていうのも、何かムカつく。

「私にだって、選ぶ権利があると思うんだけど？」

律子は腕組みをして言った。須坂君はその迫力にビビり、

「そ、そうかも知れませんが、取り敢えず、藤崎先輩には許可もらつたので」

「はあ？」

藤崎君の許可って何？　どういう事？

「律子先輩、藤崎先輩と付き合ってるんですよね？」

須坂君の口からそんな言葉が飛び出すとは思っていなかった律子は、仰天した。

「な、な、な」

次の言葉が出ない。須坂君はニコツとして、

「わかりますよ。僕、律子先輩の事が好きだから」

「???」

ええええ？　もう訳わかんない！　律子は暴発しそうだった。

「好きだから、その人が誰を見ているのかもわかるんです」

須坂君は真面目な顔で冗談みたいな事を言う。

「と、突然そんな事言われても……」

「この前、僕も突然、『私の事、好きなの？』って言われましたけど」

確かに言つたのだが、律子の記憶装置には書き込みされていない。

「な、何の事？」

律子は尋ねた。記憶にないからである。決してロツ〇ード事件の被告人の真似ではない。

「やっぱり覚えてないんですか。先輩らしいけど」

「あのねえ」

律子が反論しようとする、須坂君は深々と頭を下げて、

「お願いします！ 今日だけ、何も言わずに付き合ってください。明日になったら、きれいさっぱり忘れますから！」

それはそれで何となく嫌なんだけど。ああ、それから、藤崎君にお説教しなくちゃ。

「仕方ないな」

「ありがとうございます！」

須坂君は大喜びだった。何か可愛い、と思ってしまう律子である。

そんな事で、その日は須坂君と遊園地デート。お化け屋敷にジェットコースター、メリーゴーランド。そして、締めは定番の観覧車。

「今日はありがとうございました」

「お役に立って何よりです」

お互い微笑んだ。

「残念だわ。藤崎君の前に、須坂君に出会えてたらね」

律子がお世辞でそう言うと、

「今からでも遅くないですよ」

と調子に乗る。

「無理です」

非情な答えが返り、ガックリする須坂君。

「まあ、君はまだ若いんだから、今年入社して来る新人の子にアタックしなさい」

「はい」

まだ悲しそうだ。律子は須坂君の手を握った。

「せ、先輩……」

ギクツとする須坂君。そして何故か目を閉じた。早合点に呆れる律子。

「こらこら、あんたは中学生か！」

え、という顔で目を開く。

「楽しかったわ。遊園地くらいならいつでも付き合うから、また誘ってね」

「は、はい！」

立ち直るまで、しばらく優しくしてあげようと思う律子だった。

（ごめん、藤崎君！）

心の中で土下座する。

須坂君とはそのまま現地解散し、律子はアパートに向かった。

「あれ？」

すると、アパートの前に藤崎君がいる。

「やあ、お帰り。デート、楽しかった？」

笑顔で訊かれてもねえ。

「もう。余計な許可、出さないでよね」

プリプリと言う。藤崎君は頭を掻きながら、

「いやあ、自分の彼女がモテるのって、何か嬉しいんだよね」

「バ、バカ！」

顔が火照るのがわかる。

「今日は泊めてくれない？　もう僕のアパート、門限過ぎちゃってさ」

「そのジョーク、つまんない」

「アハハ」

二人はそんなやり取りをしながら、律子の部屋へと入って行った。

そして翌日。律子は藤崎君を先に送り出すと、部屋を片付けてアパートを出た。

「ふう」

突然泊まりたいと言いついて、親戚の子じゃないんだから。ドキドキして、眠れなかったわ。

何もされなかったのは、何となく寂しいけど。

それより、香との話の対策が練れて良かった。

とにかく謝る。それしかないという事で完全に一致した。

「香、今日は来るよね」

自分に言い聞かせるように呟く。

足が竦む。会社に入るのが怖かった。でも、ここで逃げても何も解決しない。

律子は決断し、ビルに入った。

ところが、香はいなかった。まだ来ていないのだ。休みなのかどうか、係長も知らないらしい。

「まさか、香君まで辞めてしまうのではないだろうか？」

係長は不安な顔でまた律子を見た。

（ホント、殴りたい、こいつ！）

確かに、真弓に続いて香まで退職してしまったら、律子も不安だ。業務量が一人でこなせる量ではないのだから。新人を使えばこなせるかも知れないが、それが元で新人まで辞めたりしたら、今度こそ係長に何を言われるかわからない。

「おはよう」

あれ、この声は？ 意外な人物の登場に驚く。

「課長、どうされたんですか、その顔？」

係長が、左の目とその周辺を大きな絆創膏で覆われた平井課長を見て言った。フロアの視線が一斉に課長に向く。全部知っている律子には皆の半分も興味がない。

「あはは、熱があるのに無理して動いたら、階段から転げ落ちてね。このザマさ」

見え透いた嘘吐いて。律子は笑いを堪えるのが辛かった。

「それはご災難でしたね」

係長は口ではそう言っているが、できればずっと出て来て欲しくなかっただろう。何しろ、彼と課長は同期なのだ。生まれ月で言うとか、係長の方が先である。課長は部長と親しいため、課長になれたのだ。

「さあさあ、仕事仕事！」

課長が迷惑そうにしているのに気づき、係長は部下達に言った。

課長はその隙に課長室に消えた。

（普段はフロアをウロウロして、女子社員にセクハラ発言するのが課長の『仕事』なのに）

さすがに真弓に一発もらったのが効いたのか、今日の課長は大人しかった。多分、真弓が辞めたので出社したのだろうし。

「課長、大丈夫ですかね？」

何故か今日もコーヒーを入れてくれる須坂君。

「あ、ありがと。昨日できれいさっぱりじゃなかったの？」

律子は嫌味混じりに言った。すると須坂君は苦笑いをして、

「嫌だなあ、律子先輩は。コーヒーは、そういうつもりではないですよ」

「ふーん」

それはそれで寂しいと思う律子である。

「何か知ってますね、先輩？」

須坂君が小声で尋ねる。

「何も知らないわよ」

律子は惚けた。須坂君は残念そうに自分の席に戻る。

「おーい、藤崎。受付から連絡があった。面会の人が来ているそう
だ」

「面会？」

藤崎君チラッと律子を見てから、フロアを出て行った。

（何だろ？）

律子が不思議に思っていると、携帯が震えた。メールだ。

（か、香？）

香からのメール。ロビーに来て欲しいとあった。

「ちょっと抜けるね」

律子は隣の新人女子に告げると、彼女の返事も待たないでフロアをそっと抜け出した。

（藤崎君を呼び出したのも香ね？ どういうつもりなんだろう？）

律子はドキドキしながらロビーへ向かった。

ロビーに着くと、香は藤崎君とソファに座るところだった。

「あ、律子」

「香」

お互い気まずい。律子はそれでも、

「ごめん、香」

「私こそごめん、律子」

「え？」

律子はキョトンとして香を見る。

「私、律子が藤崎君と付き合ってるの気づいていたの」

「え？」

意外な事実だった。律子は藤崎君と顔を見合わせた。

「それでも、私は藤崎君が好きだから、告白したわ。でも藤崎君は私を見ていなかった」

「あ、その……」

藤崎君が何か言おうとすると、香は苦笑いをして、

「私が勝手に藤崎君に告白して、勝手に合鍵を作って、勝手に彼女気取りになってた。私、嫌な女よね」

「香……」

「香さん……」

律子も藤崎君も言葉が出ない。香は涙を流していた。

「僕の方こそ、香さんにはつきり返事なくてごめんなさい」

藤崎君は頭を下げた。律子は、

「私も、隠したりしなければ良かったの。香、本当にごめん」

「謝らないでよ、藤崎君も、律子も。私、余計惨めになる」

香は泣き笑いをして言った。律子はそれでも深刻な顔で、

「そ、そう」

香は涙を拭って、

「あの日はどうかしてた。走って逃げたりして、バカみたいだった」
律子は藤崎君と顔を見合わせる。

「心のどこかで、『どうして藤崎君は私ではなくて律子を選んだの？』って思ってたのよ。だからあの時も、律子を騙さないでなんて言おうとしたのね」

それは私もそう思ったよ。律子はそう言いたかったが、嫌味に聞こえそうなのでやめた。

「思い上がってたわ。本当に恥ずかしい」

香は俯いてしまった。

「よし、行こうか、香」

律子は立ち上がった。香はキョトンとして、

「行くなってどこへ？」

「仕事場によ」

「ええ？」

律子は半ば強引に香を連れてエレベーターに歩き出す。ビクリしていた藤崎君も慌てて二人を追いかける。

「もう全部終わったでしょ？ 誤解も蟠わだかまりもないよね？」

律子はエレベーターを待ちながら、香に問いかけた。

「え、ええ。律子にないなら、私にはないわ」

「なら、問題なしよ！」

律子の笑顔に香は釣られて笑った。

「おお、香君、待ってたよ」

「香先輩、大丈夫ですか？」

同僚達が温かい言葉で香を出迎えてくれた。

「香ね、長く休んだので、顔を出しづらかったんですって。で、私が付き添いに行ったの」

律子はスラスラと嘘を吐いた。香と藤崎君は、その嘘に驚いてしまった。

「何だ、そうだったんですか。全然気にする事ないのに、香先輩」
須坂君はやけに嬉しそうだ。その笑顔にちょっとだけ嫉妬する。

「そうだよ、香君。君がいないと、律子君が業務を全部引き受ける

事になってしまふんだよ。その方がずっと困るんだよ」

相変わらず酷い事を言う係長だ。私もボクササイズ、習おうかな？
そう思う律子。そして藤崎君を見る。藤崎君はピースサインで答えてくれた。

しばらく香の「歓迎会」は続いた。律子がふと見ると、羨ましそうにこちらを見ている課長と目が合った。

（あんたは自業自得でしょ？）

律子はそう思い、クスツと笑った。

お昼休み。律子は香と藤崎君と三人で食事した。もうすっかりいつもの三人になっていた。

「真弓からメールがあったわ。あの子、実家に戻ったのね」

「そう。お父さんが具合が悪いとか」

「心配ね」

香はそう言いながらクスクス笑い出し、

「それにしても、課長の絆創膏、傑作だわ」

「真弓、その事も？」

「ええ、メールに書かれてた」

事情を知らない藤崎君は、律子と香がどうして笑っているのかわからない。

「ねえ、何がおかしいのか、教えてくれませんか？」

律子と香は顔を見合わせて笑った。

「ありがとう、須坂君」

コーヒーを持って近づいて来る須坂君に律子が言うと、

「残念でした、これは香先輩にです」

「ええ？ 私には？」

「ご自分でどうぞ」

須坂君はニヤリとして香に近づく。

（変わり身が早い奴だな）

呆れながらもホッとする。

「はい、コーヒー」

代わりに藤崎君が入れてくれた。

「あ、ありがとう」

「でさ、そろそろ、公表しない？」

「うーん」

律子はそれに関してはまだ尻込みしてしまう。

「どうして知られたくないのさ？」

藤崎君の疑問は正論である。でも律子は、

「隠していた方が、ドキドキして楽しくない？」

「そうかなあ」

藤崎君は納得していなかったが、自分の席に戻って行った。

二人は知らないのだ。須坂君が、二人がロビーに行っている隙に、皆にばらしてしまった事を。

「知らぬが仏」であった。

平井課長の不倫日記その壱

私は平井卓三。

大手企業の課長だ。入社二十年でようやく掴んだ役職だ。

一昨年までは係長だった。長い道のりだった。

私の昇進を不倫相手の真弓が祝ってくれた。

「おめでとう。はい、プレゼント」

真弓はブランドのネクタイをくれた。

彼女とは長い関係だが、プレゼントは初めてだ。

嬉しくて泣いてしまった。

「やだ、泣かないでよ」

「嬉しいよ、真弓。お礼と言っは何ですが……」

「キャー！」

「真弓！」

これ以上は自主規制とします。

平井課長の不倫日記その弐

私は平井卓三。

一流企業の課長である。

そして同じ課の真弓と不倫中だ。

同期の梶部にも勝って先に昇進したし、人生順風満帆だ。

一つだけ心配なのが妻の蘭子。

彼女は専務の愛娘だ。

蘭子なしには私の出世はあり得ない。

しかし、真弓と別れるのは辛い。

真弓には「離婚を前提に付き合う」と言った。

でも無理だ。

「真弓、離婚はできない」

「約束が違うわ。別れましょう」

「そんな事言わずに真弓！」

「キャー！」

以下自主規制と致します。

平井課長の不倫日記その参

私は平井卓三。大手企業の課長だ。

明日は不倫相手の真弓の誕生日。

だが、妻蘭子の誕生日でもある。

専務の愛娘である蘭子の誕生日をすっぽかす事はできない。

私は真弓の誕生日を前の日に祝ってあげる事にした。

「おめでとう、真弓」

「ありがとう、たっくん」

「前から欲しがっていたミニチュアダックスだよ」

私は奮発して子犬をプレゼントした。

「嬉しいわ、たっくん！」

「嬉しいついでに、真弓！」

「キーンッ！」

以下自主規制です。

平井課長の不倫日記終の章

私は平井卓三。大手企業の課長だ。

今日は妻蘭子に娘の事で相談された。

高校二年で、一番扱いが難しい頃だ。

私は手に負えそうにないので不倫相手の真弓に相談した。

「私も高校生の時、親と対立したわ」

「そうか。どうすればいいかな？」

私は真剣な顔で尋ねた。

「パパは絶対に味方だと言ってあげて」

「味方か」

「それが一番嬉しい言葉だと思う」

私は礼を言おうと真弓を見た。可愛い。

「真弓！」

「キーンッ！」

以下自主規制です。

頑張れ須坂君！（千文字小説）

僕は須坂津紀雄。大手企業の新人だ。

同じ課に気になる人がいる。

その人の名前は律子。そんなに美人じゃないけど、僕ら新人に全く先輩ぶらない女性だ。

僕自身、どうして律子先輩に惹かれたのか、よくわからない。

多分、あのドジなところだろう。

お茶を溢すのは日課で、コピーは枚数を間違え、電話を受けると、

「お電話ありがとうございます」

と言ってしまふ。

スーパーオツチヨコチヨイである。

でも不思議な事に律子先輩を悪く言う人はいない。

「律子はね、何事にも一生懸命なのよ」

律子先輩と同期の香先輩が楽しそうに言う。

「あの子のドジって、場を和ませるの。私も欲しいわあ、あの才能」

真面目な顔でそんな事を言う香先輩も気になる人だ。

真弓先輩も色っぽくて素敵だし、同期の蘭子ちゃんはとっても可愛いし。

天国のような職場だ。

「いい加減仕事覚えろ！」

でも、男性の先輩は怖い。特に梶部係長は新人教育係なので一番怖い。

「すみません！」

謝ってばかりだ。

新人研修が終わり僕らは本格的に会社の業務に取り掛かった。

それでも僕は先輩の藤崎さんのアシスタントなのだけど。

僕と共に藤崎先輩を補助する事になった蘭子ちゃんと急速接近したような気がした。

「須坂さん、コピー取れました」

「須坂さん、資料作れました」

「須坂さん、取引先からのFAXです」

業務上の会話なのに、何故か僕は蘭子ちゃんが僕に気があると思

い始めていた。

ある日、その勘違いが最大になり、僕は蘭子ちゃんを無人の会議室に呼び出した。

「何ですか、用事って？」

夕日が差し込む会議室に立つ蘭子ちゃん。髪がキラキラ金色に輝いている。

「その……」

「手短にお願いします」

そう言われた時、僕は玉砕を覚悟した。

「僕と付き合ってください」

「無理です」

凄く早い返事だった。

「須坂さんとはあくまで仕事上のパートナーですので」

「はい」

僕は衝撃を受けた。

「失礼します」

蘭子ちゃんは会議室を出て行ってしまった。

数週間後。

律子先輩が何故かフラフラで出勤した。二日酔い？

何故か僕の席に座って眠ってしまう。

「ここ僕の席ですよ」

起きてくれない。香先輩に泣きつき、何とか起こしてもらった。

「須坂君、私の事好きなの？」

トロンとした目でそんな事を言われた。「惚れてまうやろー」だ。

律子先輩はそんな「爆弾」を投下したまま自分の席に戻って行った。

「ふう」

僕は溜息を吐き椅子に座る。

「あ」

律子先輩の体温が残っている。

「イエス、フォーリンラブ」の瞬間だった。

蘭子の新人OL日記（七百文字小説）

私は出島蘭子。大手企業の新人OL。

主な業務は営業補助。男性社員の資料作りやコピー、相手先企業との打ち合わせの段取り等である。

男性社員は皆とても優しいし、先輩OLの方々も、怖い人はいず、とても良い環境だ。

でも一人だけ気になる人がいる。

平井課長。

男性社員も女性社員も、私の事を「蘭子ちゃん」と呼んでくれる。

普通なら「出島さん」が当たり前なのだろうが、この課では女性
は全員名前で呼ぶらしい。

それなのに課長は私を「出島さん」と呼ぶ。

もしかして嫌われているのだろうか？

凄く不安になったので、真弓先輩に訊いてみた。

すると真弓先輩は大笑いして、

「違うわよ、蘭子ちゃん。そうじゃないのよ」

「どういう事ですか？」

私はあまり真弓先輩が笑い続けるので不思議に思った。

「課長の奥さんが『蘭子』さんなのよ。だから呼びづらいんじゃないの？」

「ああ、そうなんですか」

納得した。良かった、嫌われてるんじゃないくて。

そんな事なら、言ってくればいいのに。

「課長」

何故かビクツとされる。

「何かな、出島さん？」

「それです」

「え？」

私はキョトンとする課長に、

「私が奥さんの名前と同じ名前だから、呼びにくいんですか？」

すると課長はもの凄く驚いて、

「ちょっといいかね」

と別室になっている課長室に連れて行かれた。

「私の妻の名前をどこで知ったんだ？ 誰にも教えていないはずなんだが」

「え？ 真弓さんですけど」

課長の顔色が悪く見えたのは照明のせいだけではない。

私はとんでもない事に気づいてしまった。

知らないはずの事を知っている人がいる。真弓先輩と課長、何かあるの？

不倫？

ドラマの中だけって思ったんだけど。

だから、私の名前を呼び辛かったのか。

更に納得できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682k/>

今日でお別れ（完全版）

2011年11月15日13時18分発行